

有森信二

秀光がランニングサーブを放つと、相手側補欠チームのコート、中衛と後衛の間に鋭く突き刺さった。

後衛の末広、が懸命に体を投げ出したものの、指先をかすめてボールは落ちた。十八対十二だ。末広はボール目がけて飛び込んだとき、手の平と臍のあたりを擦り剥いたらしく、顔を歪めて蹲っていたが、「タイム」の合図を審判に送り、尻餅を突いたままコートにへたり込んでしまった。

レギュラーチームのキャプテンである僕も、相手側の末広のもとに駆け寄った。手を耳の横で振り、足を屈伸して、末広は何か立ち上がった。

元の陣形に戻りかけたとき、次のサーブがまた末広を襲った。末広の顔に「何でや」という表情が浮かんだ。審判はまだ「開始」の笛を吹いていない。

審判とは言っても、公式戦ならともかく紅白戦であるから、レギュラーにも補欠にもまだなれない下級生が、臨時で勤めている。一年生の気弱そうな審判はやや間を置き、サーブエースの判定を下した。

そのとき、秀光の得意なときに見せる、鼻を左右に蠢かす仕種が、西日に照った。

僕はコートを走り出ると、審判にはなく自チームの秀光に突っ掛かって行った。

秀光は次のサーブに掛かろうとしていたところをふいに襲われたので、ボールを放り出し、体を逸らそうとした。そこにタックルを食らわしたのでから、秀光は拗り上げられる恰好に、もんどりうって倒れた。しかし、体躯で勝る秀光はうまく受け身を取ると、なおも攻め掛かる僕の顔に蹴りを入れてきた。

仰け反った僕に、そのまま組み付いてきた秀光は、僕の首に手を掛けた。僕も力では負けない。土埃の舞うコートで、寝技の応酬になった。

僕は腹を立てていた訳ではない。秀光もそうだ。「お前を泣かすまで終わりやせん」二人が同時に叫んだ。

僕たちは、いつもどおりレギュラーと補欠のチームに分かれ、中体連の本番三日前の練習をしていた。

秀光は前衛レフトのエースアタッカー、僕は中衛センターという攻守の要だった。紅白のチームともに力はかなり接近しており、おまけにレギュラーチームは、昨日の遠征でライバルの大山中学に粘られ、土壇場で惜敗していた。

遠征の日は特に、セットが進んでくるにつれ、秀光のアタックが威力を失い、同様に僕はサーブで信じられないミスを犯した。

「野郎、あのサーブはなんちゅうザマだ」

「あのアタックのときはビビリよったやろ」

後は、言葉ではない。秀光の上に跨ったかと思ふと、馬鹿力でひっくり返される。下になつたら、すかさずコートを手子にして弾き返す。

「辞めちくれ、何でもござるんや」

守備専門の後衛の慎二が何が起きたのかと近寄つて来た。同じ後衛の清や英治も一緒だ。顧問も駆け付けた。経緯を知らないから、副キャプテンの正夫に説明を求めている。

「理由は多分、昨日の負けが口惜しゆうて、気合いを入れ合つてるんですよ」

「やりたいようにやらせりゃあいいさ」

と末広。膝に血がべつとり流れ出ている。

僕は周りから取り囲まれているのを知っており、秀光も知っている。

「この野郎」

「なんだとお、もう一遍言ってみろや」

僕の方が体躯がずんぐりしているから、寝技には都合がよい。秀光の長い手足が、こんなときは少し邪魔になるらしい。それでも、運動神経や身体能力では秀光の方に一日の長がある。

周りの視線に囲まれると、意地でも手を抜く訳にはいか

ない。まして、おめおめと引き下がる訳にもいかない。

「ぶつ殺すくらいのアイトでいかなば、このお」

「ならば、こうかい」

秀光がシャツの首を捻り上げてくる。息がフウツと止まりそうになる。

「まだまだ生温い。こいつを食つてみる」

僕は馬乗りになり、秀光の鳩尾を踝で力まかせに挟る。ヴェツ、と秀光。

秀光の父はこの春から入院している。持病の胃潰瘍が悪化して、二度にわたる緊急手術で何とか一命を取り留めた。母も長期にわたる心労と過労で、寝込んでしまったらしい。だから、長男の秀光は、学校からの帰りには父と母を病院に見舞い、まだ幼い弟妹の弁当作りから洗濯までしているという。

しかし、そんなことを言いふらす秀光ではない。

「カツコばかりつけやがつて。ビビリ癖は、ちつたあよくなつたか」

僕がそう言ったのは、秀光が父親の手術を終えて学校に出て来たときだった。

エースアタッカーが不在では、練習にならなかつたのだ。「お前の母ちゃん、めっちゃ五月蠅いばかりやな。部屋のたいていの連中が、えろう迷惑がつとるぜ」

僕の母は、病院の掃除婦で秀光の両親の具合をよく知っている。

「二人の弟妹より、秀光が一番の泣き虫じゃろね」といつも言う。

僕の父は、末広の家の雑貨屋が営む精米所で働いている。糶摺りの注文を取って来ては、精米をしオート三輪やバイクで届けに行く。ついでに、焼酎の配達もする。雑貨屋の雇われだから、何でもしなければならぬ。

放課後は、中学校にも毎日バイクでビールと焼酎を運んで来る。

近付くと糠臭く、アルコールの臭いも染み付いている。

「おっさん、来たじゃねえか」

父がコート近くを通り掛かり、僕と秀光の一戦に目を留めているらしい。

「大丈夫、大丈夫。ガギの遊びやから」

末広が、従業員向けの言葉で説明し追いつくと、バイクの音は遠ざかって行った。

秀光の図体が僕の上半身の上に乗り、両足で僕の下半身を組み敷いた恰好で、右手は僕の胸倉をしっかりと掴み、左手はいつの間にか流れ出した鼻血をこすっている。胸に鼻血が落ちてくる。

僕はここでエンドにしても、もう恰好はつくかも知れないと思いつながら、鼻血の隙をついて海老のごとくに跳ね、体を入れ替えると、今までとは逆に秀光のシャツの襟首を両手で捻り上げた。

不意をつかれたらしい秀光は、不覚を取ったという目の色を白黒させながら、口をアファアと動かして、少しだけ動きを止めた。

このまま、力を込め、後三分締め上げたら、ひよつとして秀光の息の根を止めることが出来るかも知れないと思った。自分の奥底の心が、それを待ち焦がれているのかも知れないという、訳のわからない恍惚の気分には陥った。

それより、今、秀光は無防備の体を曝してはいるが、機をみて再逆転を狙っているのかも知れないとの猜疑心も首をもたげてくる。僕は、注意深く秀光の目を見、口の動きを見、手の動きを見た。

何より、これが秀光の死んだふり戦法だとしたら、次の瞬間には僕が口を空に向け、泡を吹くことになる。僕はあくまで慎重に、秀光の反応を見ようとした。

試しに、周囲に群れている筈の部員たちの動きを目で追った。

ところが、ほんの先刻までいた筈の連中がいない。顧問も、末広も、副キャプテンの正夫も、慎二も、清も英治ま

でない。

「どうしやがった。どこに行きやがった」

ひよつとして、下校のチャイムが鳴り、勝手に組み合っている僕たちを残して、校舎に引き上げたのだろうか。未広など、「ガキの遊びなんやからな」と言っていたぐらいだから、まさかこんな事態に進展するなどは、誰一人予想しなかったのだろう。

それにしても、秀光は唸ることも、呷くこともしない。両腕は力無くコートに垂らし、だらりと伸ばしている。

「秀光、泣いたらええで」

僕は、秀光を軽く揺すってみた。返事がない。

「泣いてみる。泣いたら勝負は終わるんやで」

僕の両指は、そう言いながら、なおも力一杯秀光の襟首を締め上げている。

しかし、返事はおろか、秀光の顔からだんだん血の気が引いて行く。

「泣いてみる。死んだ真似するなんぞ、卑怯じゃろ。ほら、泣いたらええんじや」

僕はハッと気付いて、襟首から手を放し、今度はバチバチと秀光の頬を叩いた。

「ええ、どうした。さっきまでの気合いはどうした。まだビビッてやがるのか。ふざけるんじやないぜ。おい、まさか本気なんかじゃないよな、お前。だって、家の面倒見ん

といかんのやろ」

僕は、どうしたらよいかわからなくなった。「何で誰もいなくなつたんだ」と呷きながら、頭のどこかにまだ「阿呆め。見事に騙されやがったな」と薄ら笑いを浮かべ起き出してくる秀光の茶目つ氣ぶりを、信じていた。

「人工呼吸や」

「大至急、救急車を呼べ」

顧問が慌ただしく指示する。僕は、秀光の体から離れ、コートの端に蹲ったままにいる。

早目に練習を終えた野球部員が、僕たちを冷やかそうと通り掛かり、保健室と顧問に連絡してくれたのだった。

保健の教諭が人工呼吸を繰り返した。秀光の口に直接息を吹き込み、吸った。首を捻りながら、何度も挑戦した。

保健部の女生徒が、胸を押したり引いたりした。

いつの間にか、輪が出来ていた。商店の連中まで駆けて来て、「三輪車は動けんのか」などと声高に叫んだ。

「あかん、あかんぞ。なんとかならんか」

教頭が保健の教諭の顔を下から覗き上げ、悲鳴に近い声を上げる。保健の教諭は、女生徒と交替し、あみだに被った野球帽から汗を滴らせながら胸を押し。

「ようつしや、もう一遍」

気合いを入れ直した保健の教諭がシャツを脱ぎ捨てた。

肌着にまで塗れ通った汗がコートを濡らし、百回、百三十回と教諭の指先に力が込められた。

僕は真前に進み出、「起きろ、秀光。ふざけるな。卑怯もんめが」と胸底からの声を絞り上げていた。

保健の教諭の指先の動きが、二百五十、二百八十と正確に回を重ねていく。

「ウ、ウツ、ウー」

三百十を数えたところで、俄に秀光が微かな息を漏らし、苦し気に眉を蹙めかけたのと、救急車のサイレンの音が間近に聞こえ始めたのが、ほぼ同時だった。

了